



TITLE:

馬に因む星座

AUTHOR(S):

山本

CITATION:

山本. 馬に因む星座. 天界 1942, 22(256): 379-382

ISSUE DATE:

1942-09-01

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/168437>

RIGHT:

馬に因む星座

(山 本 生)

例年の干支に因んで、今年の午の歳のために、馬に關係のある星座を書いて見ませう。馬に因む主な星座はペガソスと、小馬と、センタウル（及び射手）とです。

秋の夕暮れの天頂に、ペガソスの星座は、俗に「正方形」に並ぶ四つの二等星を最も見つけ易い目標として現はれます。ペガソスは、ネプテユン神の意志により、妖魔メデューサの血の滴りから生れた神馬だといふ言ひ傳へで、背部には翼を有ち、地を驅ける代りに、空を飛ぶ馬なのです。昔のギリシヤ人には、速度への憧れが、こうした神話を生んだのでせうし、更に之が空の星座に擧げられて、神秘思想を増し加へたのでせう。（近年、ガソリンの一種に此のペガソスの名が與へられたのも、面白いことです。）今の吾々ならば、空を飛ぶ超速

度の象徴は飛行機といひたい所ですが。

ペガソスは東西五十度、南北三十餘度に擴がる大星座で、エプ星が馬の首、テ星とゼ星とがたてがみ、ア星が肩、ガ星が背部、又、ベ星とエー星あたりは前脚に當ります。ですから、普通の星圖で見ると、この神馬は逆轉してゐるやうにも思はれますが、初秋の日の日没後、これが東の地平線から昇つて來る姿を見ますと、可なり自然で、勇ましい悍馬の躍り上る形に見えます。

この星座は紀元前千年以上も昔から、バビロン人、エトルスカ人及びヘテ人たちによつて「馬」と呼ばれ、従つて、其の後のギリシヤ人も、 로마人も皆、最初は只「馬」の星座と呼んでゐました。アラートスに至つて「神馬」と呼ばれ、エラトステネスが始めて「ペガソス」と名づけ、更に中世に至つて、詩人たちが、翼のある馬形を想像したのでした。

星座の「ペガソス」は馬の上半身だけで、腰から後脚はありません。それで時々これは「半身馬」とも呼ばれますが、或る人の説によれば、これは、昔の船の舳首を飾つた大きい馬形から來たものだと言ひます。従つて、この星座が

ペルセウスの乗馬と考へられるやうになるまでに、既に永い歴史があつたことが想像されます。

ペガソス座にデ星が無いと學者たちは言ひますが、それは誤りで、正方形の一隅にあるアンドロメダ座のア星が、紛れも無いこのデ星なのです。この星は兩星座に籍を置いてゐるのです。

小馬座はペガソス座のすぐ西隣りにある小星座で、四等以下のア、ベ、ガ、デの四星が歪んだ四邊形を作つてゐます。見慣れれば可愛い形です。言ひ傳へによれば、この星座はギリシヤのヒパルコスが作つたものと言はれ、トレミーは之を「馬の胸像」と呼びましたが、後代の人々は、むしろ其の位置がペガソスに先驅することから「先驅」と屢々呼びました。ギリシヤ神話では、之はペガソスの弟「セレリス」と考へられてゐます。

セントウルは半人半馬の怪物で、ギリシヤ神話に特有のもので、ギリシヤ建國の初期の頃、彼等が戦つた北境の蕃人中に乘馬の兵（騎兵）があつたのを見て、これを半人半馬の怪物と思つたのが始まりで、遂に其れが神話の中に採

り入れられたのでした。(ギリシヤには、歩兵ばかりで、騎兵が無かつたのです。) 従つて、最初はセ centaウルは粗野な蕃人風に考へられてゐたのですが、神話の中で、これは漸次高尚な者と考へられるやうになり、遂に此の一族中からヒロシと呼ばれる文化的な教養のある人物を空想するに至りました。

セ centaウルは二つの星座に表はれてゐます。一つは春の南天に、南十字座と共に見えるセ centaウル座であり、他は、夏の南天に蝎座を追ふ射手座です。射手は西を向いて弓を引き、セ centaウルは東を向いて槍を振つてゐますが、何れも之は騎兵の戦法を表はすものです。

射手座は三等以下の多くの微星から出来てゐますが、その中にある銀河の一部は吾が宇宙の中心を含み、現代の天文學上、非常に重要な部分です。又、セ centaウル座の方は、二ケの一等星アとベをと含み、天空の廣大な部分を占め、尙、南十字星座を三方より圍繞してゐて、實に賑々しい空を見せてゐます。此のア星が太陽系に最近の恒星であり、又、著しい二重星であることは、衆知の事實であります。(終)